

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



瑞北分教会

昭和56年11月26日 設立
昭和56年12月5日 鎮座祭
平成6年4月18日 移転建築
平成6年7月23日 鎮座祭

教祖百四十年祭 笠岡大教会活動方針

つながろう、おやさまのお心に。
つなげよう、信仰の喜びを。

活動
目標

ひながたを学び、そのお心を実践しよう。

実践
項目

毎日、喜び・感謝を声に出そう



立教188年
2月号

大教会長様お話

年祭当日を、うれしい心で

迎えられる1年に

1・20年頭会議において

立教188年大教会年頭会議は、1月20日午後1時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長夫妻・布教所長らが参集した。

大教会長様は、先ず、真柱様年頭のごあいさつを拝読され、そのなかで「一手一つ」につとめることが一番大事だと述べられた。

続いて、年祭活動締めくくりの1年を通るうえでは、「人をたすける心／陽気な心」の2つの心で通り切るよう促され、初代の道に倣って「添え願ひ」のお願いづとめをつとめられたら教えてほしいと望まれた。

最後に、昨秋季大祭の真柱様のおことばを引用され、年祭の当日をうれしい心で迎えることができるように、締めくくりの年を、勇み心を奮い起こして通ろうと奮起を促された。

引き続き「年祭活動推進講習会」

が開催され、その後、弁当持ち帰り組・会食組に分かれて散会した。

(要旨は次の通り)

【真柱様年頭のごあいさつ】

明けましておめでとうございませう。旧年中はいろいろとおつとめくださって、ご苦労さまでした。

いよいよ年祭活動の最後の年になったのであります。二年余り前、立教一八五年の秋に諭達を出しまして、そして、その次の年から、三年千日仕切つての年祭活動の期間に入つたのであります。それから、はや二年が経つたわけでありませう。

諭達は、全教が心をそろえて年祭に向かって歩むために出したものであります。みんな一手一つとなつて、たすけ一条に邁進する姿をもつて教祖にご安心いただき、お喜びいただきたいという気持ちであつたのであります。

一手一つというのは、一つの目的に向かつて、それぞれが自分の与えられた立場の務めをしっかりと果たすことによつてご守護いただける姿と言ふことができるかと思

います。本当に一手一つになれば、自分一人では出ない力を与えていただくことができるでしょう。また、自分一人では味わうことのできない喜びを味わせていただくことができると思うのであります。その一手一つになるためには、まず一人ひとりが教祖の思召に心を合わせることであります。すなわち、神一条になることであります。

神は心に乗りて働く。心さえしっかりすれば、神は自由自在に心に乗りて働く程に。

(明治31・10・2)

と、お言葉にあります。神一条の心に立脚して、自分に与つた立場の役割、また、いまやらなければならぬことに一生懸命に取り組むことだと思ひます。

秋の大祭のときにお話ししましたように、現在の私たちの年祭活動に対する取り組み方は、全体として、まだまだ教祖の思召との間に大きな開きがあると思わざるを得ないのであります。しかし、その開きは、私たちの心の持ち方、それに基づいたつとめ方によつて

は、縮めることができると思ひつてゐるのであります。

三年千日の三年目、締めくくりの年であります。一年しかないとも言えるし、まだ三分の一あるという取り方もできます。思召に少しでもお応えできるように、心定め達成にしても、それぞれの目標にしても、それに一生懸命に取り組むことによつて、頑張つてつとめて、この一年を実りのある年にしていただきたいと、そのようにおつとめいただきたいと願つてやみません。

年の初めにあたつて、思うところを述べて、ひと言ごあいさつにさせていただきます。本年も、どうぞよろしくお願いいたします。

(みちねとも 188年2月号4頁)

【大教会長様年頭の挨拶】

▼「一手一つ」につとめる

立教188年、明けましておめでとうございませう。

三年千日仕切つての年祭活動期間も、いよいよ最後の3年目の年を迎えました。

私はインフルエンザで何とも言えな



年祭活動締めくくりの年を通るうえで
心のおきどころを述べられる大教会長様

ち、神一条になることであります。
と示されました。

このことと合わせて、私が笠岡の会
長として、この年祭活動3年目の1年
を通るにあたって、皆さんにいくつか
お願いしたい。

▼人をたすける心／陽気な心

その1つが、2つの心で通ること。
1つは「人をたすける心」、もう1つ
は「陽気な心」——この2つの心でこ
の年祭活動3年目の締めくくりの年を
お通りいただきますようお願いした
い。

おふでさき・みかぐらうたに、

しんちつに人をたすける心なら

神のくときへなにもないぞや

いつもたすけがせくからに

はやくやうきになりてこい 四下り目5

これからハ心しいかりいれかへて

よふきづくめの心なるよふ

月日にわにんけんはじめかけたのわ

よふきゆさんがみたいゆへから 十四25

とあります。

この3年目を通るうえで、先ほどの
「一手一つ」と合わせて、「人をたす
ける心／陽気な心」で、この1年を通
り切っていただきたい。

そのうえで伝えておきたいのは、私
自身の最近の見せられる姿から思案し
たことですが、教祖のお言葉に、
心あがれば心にこる。心にこれば
神のはたらきがうすくなる。

(高野友治著『創象』第十号)

また

つとめさせて頂く心でつとめてく
れ、その自由と言う守護がある
で。

(教祖口伝)

と仰せられ、「我が、我が：」ではな
く、神様にお働きいただけるように、
「私がさせていたたく」という低い心
で努めることが、「人をたすける心／
陽気な心」で通るために大切だと思
います。

「一手一つ」となって、「人をたすけ
る心／陽気な心」で、この1年を通り
切りましょう。

▼「心定め」／「添え願ひ」

笠岡大教会としての(本年の)心定め
は、それぞれの教会ごとの心定めを元
に、大教会の理事会で相談して決定し、
この年始に世話人先生を通してご本部
に提出しました。

また、教祖140年祭当日の御供をまだ
打ち出していないので、本日、

お伝えします。

笠岡大教会としてこれだけさせても
らいたいという心定めをお供えできる
ように、皆さんそれぞれにお努めいた
だきますようお願いします。

また、ある勉強会で学びを進めてい
て気付いたことですが、現代社会にお
いて教会がなすべき役割としてどんな
おたすけをしていいたらよいのかのヒ
ントが、教会の歴史(教会の先人たち
が通ってきたその道)にあるというこ
とで、あらためて笠岡の大教会史を読
んでいて、これを皆さんにも実践して
もらうのはどうだろうか、1つ、気
になったのは「添え願ひ」です。

以前、初代・さと会長が天理時報の
特集記事に、次のように掲載されまし
た。

さては、おさづけの理を戴くま
では、御供と「添え願ひ」でおた
すけをしました。添え願ひとは、
おたすけを願う人に、「神様の前
でしっかりとお願いしてください。
私も添え願ひをさしてもらいま
す」と諭したうえで、本人に神様
に願ってもらい、さとがそれに添
えてお願いづとめをするというも
のです。この添え願ひのおたすけ

で、多くの講社ができました。

(時報'22年10月5日号4面)

また、3代・繁雄会長は、

笠岡大教会の部内先々にはお願い

づとめのことを添え願いと云って

おります。(おふでさき御話481頁)

と記しています。

これは、「お願いづとめを添え願いと
言い換える」とか「必ず添い願いに
しなければならぬ」というようなこ
とではありません。

たすかつてもらいたい人に「神様の
前でしっかりとお願いをしてくださ
い。その願いに私が添わせてもらいま
す。」いうことを話したうえでお願い
づとめを勤めていただきたい、という
お願いです。

状況や相手によつては難しいことも
あるかと思いますが、笠岡の歴史を振
り返ったときに、初代がこの添え願
を通しておたすけを頂いたことは、今
に、我々にもつながる、人にたすかつ
ていただく1つの方法と思つたうえか
ら、この年祭活動3年目の締めくくり
の年に、添え願いⅡたすかつていた
きたい人にもしっかりと神様に向き合
うようにお願いしたうえでお願いづ
とめを勤めるようにお願いしたい。

そして、できれば、添え願いされ
ら、ぜひ、私にも教えてください。

▼勇み心を奮い起こして

最後に、昨年の秋季大祭で真柱様は、

三年千日の期間は、動かせていた

だくことが大切であります。一生

懸命取り組んで、年祭の当日、お

ぢばへ帰ってきててもこななくても、

その日をうれしき心で迎えること

ができるように、まだ三分の一

残っている三年千日を、勇み心を

奮い起こしてお通りくださるよう

に (みちねとも187年12月号7頁)

とお話いただきました。

三年千日締めくくりのこの1年を、

勇み心を奮い起こして、そして、「人

をたすける心／陽気な心」で通り切つ

て、来年立教189年1月26日の教祖140年

祭、その当日を、おぢばに帰れても帰

れていなくても、笠岡につながる皆さ

んが、「私は年祭活動、これをさせて

もらつて、これだけ成人させてもらえ

たんだ」という、うれしい心で迎える

ことができるように、この1年、勇ま

せあつてお通りくださいますように、

どうかよろしくお願いします。

ご清聴ありがとうございます。

年祭活動推進講習会

開催

布教部

布教部(田中隆之部長)は、年頭

会議に続いて「年祭活動推進講習

会」を開催、稲倉分教会長後継予

定者・北川茂久さんを講師に、地

域に根ざした教会としての多岐に

亘る活動を紹介していただいた。

(要旨は次の通り)

34歳で結婚し、翌年に布教の家岡山
寮に入寮しました。その中で自分のお
たすけ心のなさに気づきました。その
後、教会に戻り、青年として生活を始
めました。が、コロナ禍でおたすけ活動
の難しさを感じ、信者さんと共に何か
できないか模索するようになりまし
た。まずフードドライブを始め、必要
な人々に食品を届けることにしまし
た。この活動は2020年12月に開始
し、地域へチラシを配って協力をお願
いして、食品ロスを防ぎながら困つて
いる人々に支援する仕組みを作りまし
た。その後、社会福祉協議会に相談し、
ボランティア団体「ジョイアスライフ
井原」を設立しました。この団体では、

子どもの一時預かりや墓掃除、お買
物代行などの支援を提供しています。
高齢者の家庭支援や引きこもりの方々
への手助けも行い、この頃は家の片づ
けや不用品処分の依頼が増えてきまし
た。

地域での活動が広がる中、保健師と
のつながりができ、さらに他所と関係
を築く機会が増えました。現在は困つ
ている方々からの依頼は社会福祉協議
会や保健センター、地域包括支援セン
ター、市の子育て支援課から来ていま
す。ボランティアと称して活動してい
ますが、依頼に対していくらかの利用
料を設定していることで、むしろ依頼
者側は頼みやすいようです。この活動
を始めて多くの方が利用して下さり、
引きこもりやゴミ屋敷の問題があるこ
とがわかりました。また、長期入院中
の方から猫の餌やりを依頼されるなど
ひっきりなしに依頼がありますが、信
者さんや近隣の教会の方々と協力して
取り組んでいます。こうした活動をひ
のきしんの精神という共通意識をもつ
て仲間と共に頑張れるのがありがたい
です。



身近で盛りだくさんな活動例を
陽気な口調で紹介する北川茂久さん

こんなこともありました。ボランティアで病院への送迎もしているのですが、その中に精神的な問題を抱える一人暮らしの男性がおられました。送迎だけでなく受診まで付き添いをし、その経過を保健師に報告することも行いました。これは保健師にとつての支援にもなり、保健師の負担軽減になっているのではないかと感じています。この男性は心不全で入院されたのですが、家族や親族とのつながりが乏しい状況でした。入院中、彼はストレスから声を出せなくなり、私とのメールのやり取りでリングを持ってきてほしいと頼まれました。しかし、身内でない

私は病院側からリングを渡すことができず、何度かのやり取りを経てようやく届けることができました。彼は言葉を発せず、メモのやり取りをしました。が、彼の字もあまり上手ではなく、意思疎通に苦心しました。私は無事に退院してもらうことを願い、おさづけをお取次ぎしました。退院後、彼をおちばにお連れし、初席を受けてもらうことができました。その後2週間ほどすると、彼の声が少しずつ戻ってきました。おちばがえりのお陰と思つています。

里親活動を始めた背景には、周囲の教会の影響があり、多くの経験を聞く中で2023年3月に養育里親の登録に至りました。それ以来、複数の子供たちを受け入れています。家庭内には実子がいるので、同級生のように仲良くやっています。里親活動は基本的には一時預かりの形で行っていて、これまで4歳の女の子、5歳の男の子、さらに9ヶ月になる赤ちゃんも預かっています。実際の預かりは妻が中心となっており、児童相談所からの連絡も妻に直接行きます。特に8ヶ月の赤ちゃんについては、児童相談所の依頼

で赤ちゃんの母親の検診に合わせた送迎の支援が必要ということで、井原市の子ども支援課を通じて妻が協力する形で始まりました。赤ちゃんが乳児院に入所している間、母親は免許を持っていないので妻が送迎を担当しました。子供の訪問時に母親と直接会えるように調整し、その際に子供を預かり外泊させるなどの支援を行っていました。おばあちゃんも大変な状況にありますが、支え合って生活しているのです。が、このような家族への支援活動は実際にほとんど妻が行ってくれています。

ある日、赤ちゃんの荷物を取りに来たおばあちゃんがしんどそうな顔をしていて、心配になった私が声をかけたところ、彼女は多くの悩みを話し始めました。後日、教会で彼女の話を1時間半ほど聞き、別席団参にお誘いすることになりました。11月24日の参拝に向けて運命を切り替えるために心を定めよう促しました。おばあちゃんが語る母親の幼少期の話を聞いて、親子が全く同じことを繰り返している因縁の姿を知り、これにかかわらせて頂いている自分自身がたすけて頂いているの

だと再認識しました。当日は無事おぢばがえりさせて頂けて、教祖殿でおさづけを取り次がせていただきました。するとおばあちゃんは涙を流して泣かれていて、私はおやさまの存在をあらためて確認することができました。その後、赤ちゃんのお母さんも参拝したいと申し出て、12月27日に彼女も参拝することになりました。この一連の出来事で、本当に皆が新たなスタートを切ったと感じており、年祭の追い風に乘ってこれからも進んでいけると思っています。

昨年1年間、毎月石川県珠洲市で活動を行いました。この活動は「チーム笠岡」という名称で、メンバーは笠岡市の人だけでなく、他の地域の人々も参加しており、延べ81名が参加しました。活動内容はブロック塀の解体が多く、ブロック塀は公費では解体されず、家主が行う必要があるからです。特に夏の暑い中、この作業を行い、地元の方々から感謝されました。また、エアコンの取り付けや貴重品の取り出し、青果店のフォークリフトを活用した家財道具の運び出しなど、様々な支援を行いました。被災地支援は現地に行く

だけが全てではなく、後方支援も大切です。会長が借りた自動車を洗車して返却するなどの心遣いがあり、後方支援の重要性を再認識しました。水道修繕や土砂撤去作業なども行い、事前に行けることを伝えると現地の方々が喜んでくれることが多いです。最近では水害による土砂崩れなどの現場を目の当たりにし、思いを新たに自分ができることを考えて活動が続けていくつもりです。また、今年も引き続き支援を行うつもりで、周囲にも声をかけ共に行ける機会を増やしたいと考えています。

今の自分があるのは親のおかげだと思います。私は布教によってそのことに気づかせていただきました。そして、人生の目的は陽気暮らしであり、今はそれに向かっての道中にいるのではないでしょう。三年千日の間は動いた分だけご守護が得られると実感しております。動くことがとても大切だと思います。教会は地域に出て様々な活動を行い、教会をどうしたいかを考えて動くことも重要だと思います。稲倉の教会の設立は初代が下半身麻痺から奇跡的に回復したことが始まりと聞いている

ので、神経を通じた神の道の重要性を痛感しています。昔は住み込みの方が何十人もいたようですが、現在は形を変えて里親活動を行っています。自分の教会のルーツを辿ることが何をすべきかのヒントになるのかもしれない。自分にしか助けられない人がいるはずで、そのような人に出会えるように動かないといけないと思います。稲倉分教会は2年後に100周年を迎えますが、設立当初は地域から反対されたようです。しかしその場所で100年もおらせてもらって、何か恩返しをしたいと思っています。12月の祭典講話で真柱様は、「あと1年で年祭を迎える。三年千日で考えたと残り1年しかないとも思えるが、布教の家においては1年の間に起承転結があるわけで、1年あればまだまだいろいろできる。」という趣旨のお話をされました。1年あればいろんなことができます。140年祭や次の150年祭を見据えて、10年後どんなことをしているのかと想像するとワクワクするのです。最後に、ご存命で働き下さるおやさまにご安心いただきお喜びいただけることを願いつつ通らせていただきたいと思います。

(以上要約：布教部次長 佐藤真孝)

春季大祭講話

たんのうの理を治め 誠を積み重ねる一年に

世話人・板倉知幸先生

立教188年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よぶく・信者ら参拝のもと執り行われた。ご参拝くださった世話人・板倉知幸先生は、身近な身上・事情を通して、「ふし」から良き芽が吹く道筋を分かりやすくお話しくだされ、最後に、初帰参の方を連れてのおぢばがえりを目指して、教祖にお喜びいただく実動を促された。(講話要旨は次の通り)

最近、『みちねとも』の「出直し譜」や『天理時報』を見ると、若くして出直された方がよく目に留まります。中には、私が青年会時代を一緒に過ごした方が2人もおられ、非常にショックでした。

男性の平均寿命は81歳、女性は87歳、現代は長生きされる方が多いなか、早くに出直しされる方もおられます。

ときには「喜んでこの御用を受けたのに／喜び勇んでいるのに／あんなにいいひとなのに／信仰しているのに」と思うことが起こってきます。ひとの出直や身上・事情で悩むことをお道では一つの「ふし」と言います。

現在、教祖140年祭へ向かう三年千日の活動のさなかにあり、普段よりもまして、親神様は、ようばくに対して親心をお掛けいただいているのではないのでしょうか。

心の成人を期待されているというところから、ときには厳しいお仕込みを頂くときもあり、それがふしという形で現れてきます。

実は、20年前の教祖120年祭へ向かう三年千日に、私の身近の方々が多く出直されました。妻の父62歳、母方のおば59歳、父方のいとこおじ、母方の祖父、そして年祭間近3ヶ月前に私の父が67歳で出直しました。

人間誰しも出直しは避けられないことですが、やはり悲しくつらい別れです。しかしそこを信仰に照らし合わせて乗り越えていくところに心の成人ができてきます。

諭達には、ふしについて次のようにあります。教祖は、

「ふしから芽が出る」

と、成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいであると諭され、周囲の人々を励まされた。

また、別席のお話には、「づつなき事あればふしと思うが宜しい。ふしから良き芽が吹き、楽しみの道、見えてくるのであります。」とあります。「づつなき事」とは、つらいこと苦しいことです。

私たちは大小を問わず、必ずふしに出会います。そこに親神様の親心を悟り、生き節にしていくことによって、心の成人が進んでいきます。

11年前10月のある日、一番下の息子が「頭が痛い」と言ってきました。小学1年生の運動会を精いっぱい走り回って、それからしばらくしてからのお話です。

病院で診てもらうと、少し様子を見ることになりましたが、土日を挟んでも良くなり、酷く訴える状態になつてきたので、月曜日に再診しました。

その場でCTを撮った結果、小脳が腫れているが、理由が菌か腫瘍かわからないので、入院してMRで調べるこ

とになりました。

脳腫瘍なら親の家では診れないとのことでしたが、結果、脳腫瘍ではなくて安堵しました。

次の日に背骨から髄液を取る検査とのことでしたが、髄液を取って頭の中の圧が下がり脳が下に移動して窒息を起こすかもしれないから取り止めました。

原因が全くわからず、国内には症例はなく、海外では20人ほどの症例が似通っている、その症例を参考に治療を進めることになりました。

治療が始まり、1週間は寝たままでぐったりとしています。ステロイド点滴で腫れは引いたものの、立つことも歩くこともままならず、幼児に戻ったような状態でした。そのときは、一生、障害を持つて生活するだろうと覚悟しました。

ちょうど教祖130年祭三年千日が始まった年で、周りには「おたすけ、おたすけ」と言いながら、自分が全くできていなかったことを大いに反省させられた出来事でした。

しかし、日増しに少しずつ回復し、病院でリハビリしながら、一月後に退院することができたのです。

しかし、リハビリで通院するように言われ、一度リハビリ施設に連れて行くと「ここまで回復していれば、来る必要はない」と言われ、安堵しました。

その後、何回かMRを撮って経過を見ましたが、小脳はもう機能していない、真っ白で、やけどのようにひどい炎症を起こしたようなものと、かなりのダメージを受けたことをあらためて思い知らされました。

小脳は、運動機能や計算機能を補っているそうで、運動などもつてのほか、障害が残ってもおかしくないのですが、現在は全く問題なく普通に動くことができ、普通に学校生活を過ごせています。最近までは天理高校で野球をできるまで回復しています。

脳のことは医者でも不明なところばかりだそうですが、息子の場合、大脳の中の何かが小脳の機能を補ってくれているからようです。

教祖130年祭三年千日まったただなかにいただいたふしでしたが、このおかげで心を引き締め直すことができました。

また小学校の担任の先生が、息子のふしを通して小1のクラスメイトに、

年祭活動のおたすけを伝えてくれたようです。学級通信の文章を紹介します。

先生が2組が一番変わったな、よくなったなと思うのは、ゆうすけくんが入院していた頃です。

「ゆうすけが病気になったのは、ゆうすけのことだけじゃない。2組みんなに神様が何かメッセージをくれたんだよ」と話をした先生に、ある子がすかさず「いっぱい笑って病気を吹き飛ばせと言ってるのかなあ?」と言っていました。またある子は、「元気は普通のことじゃないんだよ、かなあ?」と言いました。

「なんでゆうすけやったんやろう?」と誰かが言ったときに、みんな口々に、「ゆうすけが一番強いから、みんなの身代わりになつてくれたんや」と言っていました。

その次のおつとめは、ゆうすけを応援しよう、みんなでお願ひしようという気持ちで、一人ひとりから溢れていて、先生は今まで見たなかで、一番心の籠もったおつ



「ふし」の意義を話される世話人・板倉先生

とめだと感じました。

後ろから見ている、「ああすごいな。こんなに小さいけれども、みんな天理教の教えを心に根ざしたたくましい子供たちなんだ」と思いました。

ゆうすけが入院してから2組のみんなは変わりました。前よりもっとひとのために考えられるようになったし、どんなときもケロツと明るく笑えるようになって、強くなったし、何より元気にあります。がとうと神様に思えるようになりました。

毎朝、神殿に座ったときに、ゆ

うすけのところがポツンと空いて、30人元気に学校に来れるのは当たり前じゃないんだよと気がつきました。

ゆうすけくんが退院して学校に来れるようになってからというもの、朝、神殿で30人が揃った日には、「先生、今日全員揃った」、誰かがお休みの日には「〇〇は熱だから、治るようにお願いしよう」と、いつの間にかそんなふうになりました。

先生は「ゆうすけくんはとてもつらかったけど、身代わりになってくれて、ありがとう」と思っています。

そして、2組が変わるチャンスを与えた神様にもありがとうと思っています。

三年千日というとき、また先生が教会の娘さんということはあるかもしれないが、小1を相手に信仰を伝えてくださっている、そのことに感激した次第です。

このことより10年後の昨年、引き続きその息子にふしを頂きました。昨年の2月3日、今度は学校へ行けなく

なつたのです。

今まで元気に天理高校に通い、硬式野球部で汗を流していました。大学でも野球を続けると決め、ある程度、推薦の内定もいただいていたことからです。原因はわかりません。体が動かない、心と体のバランスが狂った状態です。

最初は部屋から出られませんでした。が、だんだんと食事は家族と一緒に取れるようになり、普段は会話もある程度できるようになった。しかし家から出ようとはしない。やっと本部神殿に参拝に行けるようになり、少しずつ回復しているかのように思われたが、なかなか学校に戻ることはできない。3年生1学期の中間テストが終わる頃に学校へ戻ることを試みたが失敗。ときがときなので、このままずっと続くと、学校を辞めるか中退するかこの後どうなるのかというようなことが、頭をかなりよぎっていました。

そのようななか、野球部の同級生が、昨夏、県予選で敗戦して現役引退という頃から、少しずつ本人の雰囲気が変わってきたように思います。その後、やっと9月から学校へ復帰、何とか大学進学も決まって、現在に至っています。

す。

この息子の事情を通して、あらためて自分の年祭活動を顧みた次第ですが、このふしによって、2つ、感じるがありました。

1つは、息子が学校へ行けなくなったことで、不登校のお子さんを持つ親の気持ちが少しわかったような気がします。

今まで社会福祉課にいて、不登校や引き籠もりのような話をよく聞いていましたが、実際に、自分の子供がそうならないとなかなか当事者また親の気持ちはわからないもので、この件を通して少しですが、その親御さんの気持ちが感じられました。

もう1つうれしいことがありました。それは、息子の野球部の同級生が、息子の野球部への復帰を願って本部にお願いづとめに通ってくれたことです。

部員のほとんどが高校へ来てから初めてお道の教えに触れた子ばかりです。部の指導者の方々の誘いもあったでしょうが、この年祭活動まったなかというときに、同級生が人のたすかりを願い、お願いづとめを勤めてくれたという、高校生ではありますが、心

の成人の場をお与えになった神様の親心を感じた次第です。

ふいというものは、本人が乗り越えるものであると同時に、神様がそのことを通して、周りをも成人させようとなさる親心だと思います。

また、私の講社の信者さんご夫妻——ご主人はある会社に入社され、おぢばのふいんの関係から入信されました。奥さんは信仰2代目、修養科は出ましたが、天理教の信仰を嫌い、地元より天理での就職を選ばれ、信仰する気は全くありませんでした。そして、ご主人と出会ったのですが、ご主人が仕事の付き合いから修養科へ行くこととなり、内心「なんでそうなるの？主人は信仰を続けても、私は関係ない」と思ったそうです。

しかし、昭和53年、ご主人が、30歳のときにベーチェット病に侵されました。ベーチェット病とは、全身の様々な部位に炎症が繰り返し生じることが特徴的な病気で、免疫の働きが過剰になつて自身の体の組織を攻撃してしまいう膠原病の一種と考えられ、約80%の方が失明に至るそうで、国の難病に指定されています。

そのときはまだ心に余裕があり、何とかなるといふ気持ちがあつたそうです。私の父がおさづけを取次ぎに行つても、「天理教は嫌い」の一点張りでした。

昭和58年、今度は当時小学校2年生の下娘さんが、これもまた、膠原病の一種で、全身性エリテマトーデスという身上になり、自己免疫疾患で、当時は腎臓が侵されていました。これも国の難病に指定され、命に関わる病気です。入院を余儀なくされ、その間には、同じ病気で亡くなる小さなお子さんも何人か目の当たりにして、つらい思いをされたと聞いています。

主人は視力を失うかもしれない、娘は命を失うかもしれないと、八方塞がりの状態です。

「なぜ自分の家だけこのようなことになるのだろうか？」と思つて眠れず、食事を取れない状態が続いていた、そのときに、病院へ通う電車の中で、ふと私の父の顔が浮かんだそうで、何かに惹かれるように、父に会いに行つたそうです。そこで厳しいお仕込みではなく、優しく声を掛けていただき、昼ご飯をご馳走になつたそうです。それまで食事が喉を通らなかつたのに、そ

のときには涙ながらに全部いただくことができて、そこから夜休むこともできるようになったそうで、この奥さんの信仰の元一日となりました。

昭和63年、ご主人は42歳のときに、完全失明となりました。娘さんの病気は良くなつたり、悪化したりで、そのときどきに上手に付き合う日々が続いていました。私の母からはたんのうすることを諭されますが、なかなか実現するのは難しい状態です。しかし、心の向きを変えていくことで、少しずつ喜べるようになったそうです。

失明してからは、二人三脚で仕事場への送り迎え、娘さんの身上などもあり大変な時期もありましたが、何とか定年の60歳まで務め上げ、その後10年間は趣味の尺八を吹きながら、施設へのボランティア活動に従事して、ひとを喜ばせるひのきいんに励んでおられました。

しかし、親神様は次々と厳しいふいをお与えになられます。3年半前の令和3年7月、脳梗塞を患い、今度は言葉が出なくなつてしまったのです。目が見えないうえに、ついには言葉も失つてしまい、端々で見ている私どもは掛ける言葉がありませんでした。

そのようなとき、奥さんがふと「これが夢やったらいいのになあ」と言われると、ご主人は首を横に振り、「そのようなことを言うな」という仕草をされ、「これでいいんだ」というような表現をされたそうです。何とまたんのかのいい方です。私どもが講社祭に伺つても、いつも笑顔で迎えてくださいました。そして言葉は話せないんですが、みかぐらうたは歌えたんです。何とも不思議なことです。

そして昨年12月に体調を崩して長い身上の生活に終止符を打たれ、親神様のもとにお戻りになられました。本人にとれば、身上を患いつらいことが多かったと思います。今世はたんのうの日々であつたと思います。しかし、ご主人が身上になつて成人されたのは申すまでもなく、家族の方々が大きく成人をされました。

奥さんを初め、お2人の娘さんも苦労をとみにされ、そのなかで、親神様にもたれて通られた40年間は、本当に成人の日々であつたと思います。来世、生まれ変わつてきたときには素晴らしい違った人生を送られることでしょう。

生まれ変わりを教えていただい

る私たちの信仰ですので、そこを樂しみに今世を送ることが誠のたんのうにつながると思います。

ときに身上はいんねんある姿かもしれませんが、その身上で、周りの方がどれだけ成人できたかはわかりません。本人だけの身上ではなくて、家族のための身上だったことは疑う余地がありません。

ひとには必ずふしがあります。そこを喜んで通るなかに価値があり、なるほどをお見せいただけるのだと思います。

また、身上の全快が今世なくても、お道には生まれ替わりの教えがあります。そこを信じて通ってくれと仰せられます。

おさいづには、

さあ一代と思たら頼り無い。なれど、末代と思えば一つ。これだけ論じたら何か分かる。よう聞き分け。
(明治32・5・11)

また、

人間という、たゞ一代切りと思たら、頼り無い。人間一代切りとは必ず思うな。そこで一つ理がある。皆生まれ更わり、出更わりという

理聞き分け。
(明治34・9・23)

ですから、私たちは身上・事情のなかでも喜んで通ることが可能です。もしかししたら、現在、身上・事情を頂いておられる方があるかもしれません。何とかそこを喜んでお通りいただきたいと思っています。

お道では、なぜたんのうを言われるのでしょうか。

別席のお話に「人間、身上に不足ありませんけれども、前生のほこりを持つて生まれて出るのであります。そこで、世界の理を見てはなるほど、聞いてはなるほどと、十分にたんのうの理を治めねばなりません。たんのうの理は真の誠であります。身の不足あつてたんのうは出来ようまい。なれどもたんのうは前生のさんげとも仰せられます。ここをよく聞き取つて心を治めたならば、大難は小難、小難は無難となります。」とあります。

「人間、身上に不足ありませんけれども、前生のほこりを持つて生まれて出」てくるとは、出直したら、みんなの心のほこりはリセットされるのではなくて、積んだほこりはそのまま持つて

て出てくるということです。

続いて、「そこで、世界の理を見てはなるほど、聞いてはなるほどと、十分にたんのうの理を治めねばなりません。たんのうの理は真の誠であります。」とあり、周りで起こってくるのと、見ることに聞くこと全て、これは自分が蒔いた種が原因で起こつてきます。「あのようなことをされた／あの

ひとが悪いことを言った」としても、悪いことが身に降り掛かってくる、また、その悪口を聞かなければいけないいんねんが自分にあるというわけです。そこで「見てはなるほど、聞いてはなるほど」と、もしかしたら前世・前々世に、何かそうなるだけのことをしたのかもしれないと、たんのうの心を治めてくれと、いわゆるそのなかを喜んで通つてくれということです。たんのうというのとは、我慢でも辛抱でもありません。喜んで通る、苦しいなかに何か喜びを探して通っていくところがたんのうです。

続いて、「身の不足あつてたんのうは出来ようまい。なれどもたんのうは前生のさんげとも仰せられ」、身上になれば喜ぶことはなかなかできない、しかし、そこを喜んで通ることが、前

生積んだほこりのさんげになるので、そこを「よく聞き取つて心を治めたならば、大難は小難、小難は無難となります。」と続きます。

ふしがあるから、成人ができるのです。苦しいなかを通るから、ひとの気持ちもわかるようになるであらうし、思案もすれば心を定めて前へ進むことができるのです。

そのときはつらく苦しい日々であっても、ときが経てば、なるほどと思う日が必ず来るのです。

諭達にも、

ちばを慕い親神様の思召に添いきる中に、必ず成程という日をお見せ頂ける。

とあります。

最後になりますが、今年で年祭活動残り1年です。ご本部では、この1年、心定めの完遂と一手一つの力を持つて精一杯努めようということで、特におちばがえりを推奨しています。

年祭当日に帰ることも大切ですが、年祭活動のうえに、この1年間、1回でも多くおちばがえりをして教祖にお喜びいただこうと示し合わせています。

これは私のおじの話になりますが、教祖100年祭後に所属の大教会の命を受けて渡米しました。それまでは北海道旭川で事情教会を復興して務めていましたが、この機会にアメリカに出張所を作るということで、向こうへ渡りました。

大変な道中でしたが、教会を預かるまでになられ、約20年前から教会長を息子に譲るまでは、毎月アメリカからおぢばがえりをしていました。アメリカからですから、費用と時間のお供えは、相当なものだったと思います。

ところがコロナの影響でおぢばがえりができなくなったことがあります。ある年の4月から7月までおぢばがえりできず、17年間続いたアメリカからの毎月のおぢばがえりも頓挫し、アメリカから関空への直行便もなく、おぢばがえりを諦めていたときのことです。

8月2日、サンフランシスコからおじの携帯に「日本旅行の何々ですが、何か御用でしょうか？」と掛かってきました。その方の携帯に、1時間前におじから電話が掛かってきた履歴が残っていたそうですが、おじの携帯に

は掛けた履歴は残っていないし、掛けてもいません。

不思議なことですが、おじもちょうどいい機会だと思って、実はアメリカから関空行きの飛行機を探していると伝えると、台湾の飛行機会社で、台湾経由でひと月に1便だけ出ている、8月は20日に出るということで、ネットなどで探しても見つからない規定外の飛行機でした。20日なら大教会に参拝できるし、これはありがたいと飛びつきました。しかも、費用は当時400ドル、驚くほどの格安です。

台湾に到着すると、経由して日本に行く方が4・5人いましたが、おじ1人だけ係のひとが飛行機の出口で待っていて、全く乗ったことのない飛行機会社なのに、ラウンジまでエスコートされました。

ラウンジの中には5人用・4人用・2人用・1人用のテーブルがあり、どれもガラガラだったのに、なぜか2人用のテーブルに案内されました。そこで不思議なのは、1人用も空いていたのに2人用に案内されたこと、また、飛行機出口からラウンジまでエスコートされたこと、その後また飛行機出発ゲートまでエスコートされたこと、全

く知らない土地・場所で、教祖が常にお側で寄り添ってくださったような気がして、感謝で胸がいっぱいになったそうです。

その後、10月からは、毎月おぢばがえりできるようになりました。

またある年の12月、帰りのチケットが27日しか取れませんでした。当時は毎月27日に本部の詰員当番も務めていて、何とか28日の便を探したが全く取れないので、12月は誰かと交代しなければいけないと、11月はおぢばをあとにしました。

ところがアメリカに戻り、教会に着いた次の日、全日空から「翌月12月27日の便をキャンセルしてしまいました。申し訳ありませんが、28日の便に変更できるでしょうか？」と、こちらが望んでいたように変更してくれたのです。

長年の海外からのおぢばがえりの伏せ込みと、おぢばがえりの強い思いに教祖が引つ張ってくださったのだと感じにはおられません。

現在は息子の会長がその意思を受け継いで、できるだけ毎月帰るように努力していますし、おじも機会があれば率先しておぢばがえりしています。

来年迎える教祖140年祭に帰ることも大切です。しかし、今現在、三年千日を通っているさなか、実動を持って教祖にお喜びいただくこと、そして1人でも多く初帰参の方を連れてのおぢばがえりを目指していくことによって、年祭活動も充実していきます。

おぢばがえりは「帰らせてもらわねば」という思い、何とかと思う誠の心に、親神様・教祖が乗ってお働きくださるものだと思います。どれだけの誠をそこに注ぐか積み重ねるかで、をやのお働きが変わってくるのではないでしょう。

どうぞ今年1年、おぢばへ帰らせてもらうのだという誠を積み重ねて、一度でも多くおぢばがえりをしてくださることをお願いいたします。本日のお話とさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。(拍手)

※講話中、別席のお話・学級通信は、編者が文字起こししました。

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には「月日にはにんけんはじめかけたのわ よふきゆさんがみたいゆへから」と一列こどもの陽気ぐらしを楽しみに この世と人間を御創造下されたばかりではなくこども可愛い一杯の親心から成人に応じた様々な仕込みを通して 陽気ぐらしへとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私どもはこの思召にお応えするべく 日々は朝夕に御礼申し上げつつ たすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております

その中にもこの月二十六日は 教祖が一列こどもの成人を急き込まれて 世界だすけに踏み出された尊い日柄に当たり おちばでは春の大祭が執り行われますので 当教会に於きましてもその理にならない 只今からおつとめ奉仕人一同 喜び感謝の心一杯に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて 春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には寒さ厳しき中をも厭いませず 今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供たちが 相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本年は教祖百四十年祭に向けて三年千日と仕切つての年祭活動三年目 締めくくりの年であります 大教会で定めた方針と目標と実践項目 それぞれの教会で定めた目標と実践項目のもと 来年の年祭当日を目指して皆が一手一つとなつてご存命の教祖にご安心頂きお喜び頂けるよう努め励ませて頂く所存でございます また本日は世話人板倉知幸先生にお越し頂いております お聞かせ頂くこの時旬のおちばの声をしっかりと心に修め 締めくくりの年の成人の歩みに繋げさせて頂きたく存じます

何卒親神様には 子供可愛い一杯の変わらぬ親心を受け止め陽気ぐらしを目指して たすけ一条に励む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に更なる自由の御守護を賜り お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお願いの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

詰所からのお願い

詰所での宿泊・喫食について

- 詰所での宿泊・喫食を希望される方は、炊本への食事申し込みの都合上、「教会名・代表者名・泊数・食数」を **2日前までには、必ず詰所**にご連絡下さるようお願い申し上げます。
- 食事をしない（宿泊のみの）場合**でも、2日前には申し込みをして下さるようお願い致します。

部内教会・信者に徹底願います。

大教会だより

◎教人資格講習会(全期)修了者

立教188年2月10日終講
神 驛 渡 邊 響 子

◎教会長資格検定講習会修了者

立教188年2月16日終講
神 驛 渡 邊 裕 也

計 報

笹尾正治さん

大教会理事準承事
葦陽分教会長

1月16日出直されました。
享年 91才

仙田 勉さん

出雲川津分教会長
1月26日出直されました。
享年 67才

立教百八十八年 春季大祭 祭典役割表

祭主		扨者		講話	区分	役割	地方		おつとめてをどり				笛	ちゃんぽん	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓	琴	三味線	胡弓					
大教会長様	中島誠治	岡崎真一	世話人板倉知幸先生				坐り勤	内海史郎	吉岡誠一郎	佐藤道孝	大教会長様	前会長様										上原繁道	大教会奥様	前奥様	田中ますみ	岡崎真一
賛者		指図方	三月講話	中村道徳	前半	後半	上原志郎	山野弘実	山田敏教	門脇元教	今川昌彦	横山逸郎	門脇加津	横山小智榮	山野なつ	上原繁次	赤木素志	高木昭祥	内海史郎	岡田誠	上原浩	岡崎豊子	吉岡誠一郎	内海安子	上原千枝子	室悦子
山野弘実	森本忠善						上原繁道																			



昨年夏の暑さは10月に入っても気温の下がる気配はなく、本来なら9月に入ってから始める庭木の剪定が10月も半ばを過ぎてからになってしまった。今年に入ってから今だに残りの剪定に追われている。自分で組み立てているスケジュールに沿って行動しているがそんな中、地元公民館で月に2回の断酒例会を行っている私に市の広報を見たと言った電話での相談が入った。50歳くらいの男性で話を聞くと、「兄弟たちと母親の四十九日法要が終わった後の会食の席で、一緒に酒を飲んでいた弟に今まで我慢していた日ごろの生活態度に不満が爆発し暴力を振るってしまった。その夜に被害届を出され逮捕された。」という。現在保護観察の身におかれ、弁護士から月2回の面談と反省文の書面での提出を義務付けられている。何度か自宅



ホーム > 教えにふれる > 教えをまなぶ > おやさまを求めて
<https://happist.net/category/oshie/> [manabu/](#) [oyasama](#)



に伺い彼の性格・生活状況を自分なりに把握した上で彼が立ち直る手助けになればと思い、時間の取れる時には訪問して話を聞かせて貰ったり私の体験を話したりしながらこれからの事を話し合っている。この先どうなるかわからないが年祭活動仕上げの年に彼を通じて見せて頂く自分のいんねんを大教会長様の仰せ下さる人だすけの心と陽気な心を持って向き合い、これからの1年を精一杯に通切り切らせて頂きたい。(む)

笠岡大教会教祖 140 年祭活動 実践項目

毎日、喜び・感謝を声に出そう

朝目覚めて



生きている事に感謝
動ける事に感謝
布団に感謝
家に感謝

顔を洗う



水の恵みに感謝
身体に細胞に感謝

食事



天と地の働きに感謝
食べ物の命に感謝
携わった人々に感謝

トイレ



体内の働きに感謝
用を足せる事に感謝
トイレ空間に感謝

もったいない
しあわせ
うれしい
ありがたい
結構
~のおかげ
これでちょうど良い



入浴



火と水のご守護に感謝
浴室に感謝

就寝



1 日使わせて頂いた身体に感謝
出逢った人々に感謝
与った食べ物・物に感謝
大難は小難に小難は無難に
して頂いて感謝

環境



天然自然の理に感謝
天気感謝
変わらないご守護に感謝
学校・職場・地域に感謝

人間関係



縁、出会いに感謝
家族・夫婦に感謝
仲間・同僚に感謝
たすけあいに感謝